≪もくじ≫
■特集：笛が鳴り響く「地方創生」で地域自立は可能か
2頁・大川郷にみた自治・自立の精神～共的世界の生活空間
……菅　豊（東京大学東洋文化研究所教授）
4頁・生活文化が息づく淡路島の地域再生…… 土井　康晴（編集委員）
8頁・本体工事に着工した八ッ場ダム
…… 鈴木　郁子（正会員）

# 奔流

≪第15号≫
■発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL　042-381-7770
■発行人・根津　東六（共同代表）
■編集人・矢間秀次郎（共同代表）
■〒振替・00120-0-710488
題字揮毫・梅原猛

大河の一滴（15）

## 海の恵みを活かすことこそ自立への道
### ―「地方創生」なら原発再稼動はありえない―

湯浅　一郎（NPO法人ピースデポ代表）

14年11月、「まち・ひと・しごと創生法」など地方創生関連2法が成立した。東京圏への一極集中を是正し、地域で住みよい環境を確保し、アベノミックスの恩恵を地方に届けるという。しかし地域を重視するのなら、例えば原発再稼動などはありえない。福島事故は、都会に設置できない原発を交付金や諸々の財政出動と引き換えに地域に押し付け、自治体の財政構造を原発依存に変えていく中で発生し、故郷の剥奪を初め重大な地域破壊をもたらした。

この事態は、「地方創生」のためには、原発依存を一刻も早く辞めるべきことを教えている。そもそも「地方創生」を言うのなら、地域の自然が与えてくれる恵みを認識し、それへの感謝の念を共有し、自治と自立を基本に据えるべきである。例えば海の恵みという観点から考えてみよう。

福島事故で大気に出た放射能の約8割は太平洋に降下し、史上初めて原発から液体の形で放射能が海に流れ出た。放射能が流入した福島沖は、地球が受けとる太陽エネルギーの不均一をならそうとする力と地球自転との相互作用でできる太平洋の亜熱帯循環流の北西部に位置し、世界三大漁場の一つである。暖流・黒潮と栄養豊富な寒流・親潮がぶつかり合い、大規模な潮境を形成し、プランクトンや小魚が多い。その餌を求め暖流、寒流の魚群が集まる。「沈黙の春」で著名なレイチェル・カーソンが、1951年、『われらをめぐる海』で、地球という星に固有な海流として〈惑星海流〉と表現したいとした海流系が産み出す恵みの場である。そこに、国策として北から南へと原発や再処理施設を林立させ、その一つで事故が起きたのである。

川内原発で事故があれば黒潮が千葉方面にまで放射能を運ぶ。高浜や島根原発であれば対馬暖流が日本海で放射能を運び、福井のズワイガニ、大間のマグロなどは大打撃を食らう。伊方原発であれば豊穣の海・瀬戸内海を台無しにする。日本近海は、変化に富む地形、暖流・寒流の形成する潮境などにより至る所に好漁場がある。それらは、世界三大漁場と同じく地球と太陽が作る恵みの場である。それに依拠して生きていけば半ば永続的に生存は保障される。それこそが地方創生の基本である。事故がおきれば、恵みの海を台無しにするような工場に依存する選択肢はありえない。

しかるに、安倍政権は一方で「地方創生」を唱えつつ、他方で原発再稼動を目論む。両者は相互に矛盾する。真の「地方創生」を目指すのなら、まずは原発再稼働を止めるべきであろう。そうでなく両者を同時推進するのであれば、「地方創生」に嘘があることになる。

福島事故を経た今、人類は、「海を毒壺にするな」という生命の母・海からの警告に真摯に向き合い、現代文明の脆弱な社会構造を見直すべきである。そして生命の基盤であり、多様な生命が生きる場である海の恵みを活かす道をこそ歩まねばならない。その作業を通してこそ地域の自立への道が見えてくるはずである。

（賛助会員）

＊主な著書、『海・川・湖の放射能汚染』（緑風出版）、『科学の進歩とは何か』（第三書館）、『平和都市ヒロシマを問う』（技術と人間）など多数。